慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	先生と私 (佐藤朔先生のこと)
Sub Title	
Author	梅田, 晴夫(Umeda, Haruo)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1967
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.23, (1967. 2) ,p.344- 347
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	佐藤朔先生還暦記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00230001-0344

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ので、第三者にとってはそれを探しだすのがまた一苦労である。しかし埋もれていることはたしかなのである。（中略）僕のような詩の愛好者には、そうした埋もれたものを探し出すことに非常な興味がある」（傍点筆者）

二流の自由を早くも揚言したのは、先生とも因縁の浅くないジャン・コクトオであった。こんなところが、ぼくは好きなのだ。一流の詩人や文学者、ボードレールやサルトルを読む先生の目が、その同じ夜に、若い無名の作家の作品を――たとえば、ピカソと共に飢えた犬のようにさまよっていた若いコクトオのような、得体の知れない青年の詩を、あるいは無名の一大学生の戯曲の生原稿を読むということが、有難い。あの眼鏡の奥の、つめたいような、あたたかいような眼を、畏敬する所以である。

（一九六六・一一）

先生と私

（佐藤朔先生のこと）

梅田晴夫

先生の大宮前のお宅は私にとってなつかしいと同時に、灰色だった時代に生きていた私の心に、ホンのかすかな希望のようなものを私はそこから得て帰った、大変ありがたい場所であった。

私がそのころウージェヌ・ラビッシュの、ヴォドビル喜劇のことなど、熱心に勉強しているのを先生は果してどのようにごらんになっていたのか。

本当ならモリエールとかラシーヌとかを、まじめに研究

すべき時代に、私はそんなことで時間を空費していると言われても仕方のない生活であった。

——梅田君、戦争というものは負けるときまってからの二年間が辛いものなんだよ。

何の話のつゞきであったか、前後のことは全く覚えていないが、ある日、そう先生が言われたこと、その時の瞬間の情況、少し、うすぐらくなり、また電灯をつけるほどでもない時間の、その時の先生の服装、腕ぐみをされていた姿、私のなんともいえない恐怖のような感情、いまでもまざまざと思い出すことが出来る。

——負けるときまってからの二年間……

私は日の暮れた道を、駅の方に急ぎながら先生のその言葉を口の中でくりかえしていたのを覚えている。

私は先生からある雑誌のラビッシュ特輯号を拝借して帰り、それを貪るように読んだ。もう外国から本がとれなくなってからしばらくたってからのちのことである。

やがて、日本が戦争に負けるということがはっきりする時代が来た。

そのときから、敗戦までの一年何ケ月というもの、そして負けてからの数年間のみじめさといやらしい日日のことを今更こゝで再録することはないが、先生の言われたことが日日実現して行く光景を眺めながら、私は自分がよき師を持ったということをしみじみと感じた。

私は先生が私の将来にどんなイメージを持って下さったかは分らないが、ともかくそのイメージとはおよそかけちがってしまったであろうことはたしかである。

私はそのころ先生のポールヴァレリーの〈ムッシュ・テスト〉の講義をうかがって、せっせとノートをしたが、そのときのノートを今でも大切にもっていて、時々夏休みに湘南の山荘に行ったときなど取り出してパラパラとめくってみることがある。

実に立派な、スキのない、しかも思いがけない発見と飛躍に満ちた講義であったと思う。

私は先生のボードレールの〈悪の華〉の講義もノートし

て持っている。だが、私にはボードレールより、ヴァレリーの方が体質が合うのかどうか分らないが、〈テスト氏〉のノートからは今もなお私は新しい発見をするのである。

誰もが同じことを口にするのかもしれないが、私はその二つのノートを読みかえすたびに、そのころ、本当に、もう少し身を入れて先生の講義をきくべきであったと思う。

もう少し自分が予習して行けば、もっと、こゝのところを掘りさげて、先生に質問することが出来たのではないか、もしそうすればそこに思いがけない、ラッキーストライクとでもいうものがあって、思いもしなかった金鉱を掘り当てて、ヴァレリーというものがもっとよく、あっさりと摑めたのではあるまいかなどと思う。

教育というものは、先生と生徒の〈対話〉の中にその本質があるということが、逆の意味で私には痛いほどよく分る。

先生と〈対話〉をする豊かな機会に恵まれながら私は少しも対話をしていなかったことがノートを見ると分るからである。

つまり私は先生と対話が出来るほど、予習をしなかったし、復習もせず、ドストエフスキーの小説なんかを読みふけっていたのである。

今考えれば、ドストエフスキーなんか、いつでも読めたのである。だがそのときの私はどういうわけか、いまこれを読まなければダメだという風に思いこんでいたのである。

先生に佐藤朔、先輩に白井浩司というよき師友に恵まれていたのに、私はフランス文学の道を踏みまよってしまったのである。

私は幼いころ、三田の山の銀杏の葉が黄色にそまって散り敷く季節に、若い学生たちにかこまれて立ち話をしている〈教授〉の姿にみとれたことがある、幼稚舎生であった私は学校からの帰りに山の上でよくそういう光景を見かけた。そしてみとれたのである。

そして私はいつか自分もあのような〈教授〉になろうと

心にきめた。しかし私はそれとはおよそちがう方向に歩きすぎてしまった。

だが、幼い日にみとれた〈教授〉の姿は、いまも私の心につよく残っていて、今、私は佐藤先生にそのイメージを重ね合せているのである。

私は数年前のある夏の夕暮に、偶然三田山上で丁度私の幼い日にみとれた通りの光景を見た。その〈教授〉が佐藤先生であった。若い学生がワイシャツ姿であるところだけが私のイメージとちがっていた。

私たちはいま平和とよばれる時代に生きている。

戦争に負けると分ってからの二年間……などともう先生はおっしゃるまい。しかし、もしかして〈戦争〉ではなく、別なことばがそこに当てはまるような世の中が来ないとはかぎらないようにも思われる。そんなときは、また、今度は私の子供を連れて、先生にお話を私も伺い、子供にも伺わせたいと思う。

佐藤先生の弟子

遠藤周作

私は日吉の頃、独逸語のクラスであったが仏文科を三田で選んだのは、佐藤先生の「仏蘭西文学の潮流」という本を読んだためだった。

今でもはっきり憶えているが、ブルーの表紙カバーのかかったその本を私は偶然、下北沢の古本屋でみつけたのである。

この本で私はフランス二十世紀カトリック文学の存在を知った。マリタンが監修したロゾ・ドールや島々叢書のよ